

令和5年度 岐阜県現代陶芸美術館 美術品等収集委員会 議事録

日時：令和5年9月13日（水）14：00～16：00

場所：セラミックパーク MINO イベントホール

出席者

- | | | |
|------|------|-----------------------|
| ○委員 | 伊藤嘉章 | 愛知県陶磁美術館総長、町田市立博物館館長 |
| | 唐澤昌宏 | 国立工芸館館長 |
| | 外館和子 | 多摩美術大学教授、美術評論家 |
| | 橋本麻里 | 柑橘山美術館 開館準備室室長 |
| | 矢橋龍宜 | 矢橋ホールディングス株式会社代表取締役社長 |
| ○事務局 | 石崎泰之 | 館長 |
| | 久野茂之 | 副館長兼総務部長 |
| | 高井哲也 | 県民文化局文化伝承課長 |
| | 長瀬勇 | 課長補佐兼係長（総務担当） |
| | 小栗祥吾 | 学芸部長 |
| | 岡田潔 | 課長補佐（学芸担当） |
| | 飛弾一成 | 課長補佐（学芸担当） |
| | 花井素子 | 係長（学芸担当） |
| | 立花昭 | 係長（学芸担当） |
| | 林いづみ | 主任（学芸担当） |

議事録

■イベントホールAにて

久野副館長 本日はお忙しいなか、ご出席いただきありがとうございます。これより岐阜県現代陶芸美術館令和5年度美術品等収集委員会を開催する。

～委員・事務局員を紹介～

それでは、これより委員会の進行については石崎館長が行う。

石崎館長 大変お忙しいなか、お越しいただきありがとうございます。購入費が昨年より若干、というか半分になっている。今年の春『ハンガリー現代陶芸展』をおこなったため。コロナ、燃料高、円安が重なり、輸送費が想定の3倍くらいになり、展覧会はできたけれど、そのために購入費を節約している。購入は数点だが、寄贈などもあるので、審議をよろしく願います。

小栗部長 昨年に引き続き宜しくお願いたします。今回の委員会の進行議事についておこなう。収集作品について、手元の資料をもとに、調書内容の説明をおこなう。その後、作品を隣の部屋で確認いただきたい。確認後、皆様よりご意見をい

ただき、まとめたいと思う。手元の資料、調書をご覧いただきたい。購入 3 点、寄贈 36 点、寄託 2、計 41 作品。

また、購入予定額、評価額も記載しているので、作品を見た後、質疑応答の際に、あわせて意見・感想をいただきたい。なお、この資料は、委員会終了後に回収するので了承願いたい。

～収集方針の説明～

それでは、候補作品について説明する。(以下調書に沿って説明)。実際の作品を十分にみていただきたいので、説明については簡潔にする。

○購入作品 調書内容の抜粋

○寄贈作品 調書内容の抜粋

○寄託作品 調書内容の抜粋

小栗部長 岐阜県美術館とも、陶磁器の収集にかかわる情報交換をしている。本年度は、豊場惺也の作品について、岐阜県美術館でも購入や寄贈の検討を進めているもよう。両館ともに、収集方針にあわせた収集となっているが、同じ県有施設として、今後も情報共有をして、お互いに有益になるよう進行していきたい。

小栗部長 担当学芸員で、補足があれば願います。

立花学芸員 加藤土師萌の大飾壺については、平成 21 年にも寄託として審議いただいたものがあり、結果的に真作ではなかった。ただし、本作についてはその時から経緯があり、調書を補足する。本作は、土師萌氏の親族の方のところに秘蔵されていたもので、平成 22 年に実見している。一般的な萌葱でなく、黄地となっているのは、当時、皇居宮殿に収めるために制作した大飾壺の制作費がかさみ、それを補うために、内々で制作したと聞いている。その後、親族の方が亡くなったため、売りに出されたものであり、間違いのない加藤土師萌の作品と言える。

石崎館長 それでは隣の部屋に作品を並べているので、実際に作品をご覧いただきながらご確認、ご検討いただきたい。よろしく願います。

■イベントホール B 室にて

(加藤土師萌 No. 1)

伊藤委員 胴に筋があるねえ。何段か積んでいるんだろう。

立花学芸員 『偲ふ』をみると、継ぎ目を調整して見えないようにしているが、焼成すると出てくると書いてある。竹の節のようと言っている。最初は井上萬二さんにロクロで成形して積んでいったが、うまくいかず、有田で行われていた、火鉢を作るときに使う外型を使った成形でいい形のものができたと書かれて

いる。

伊藤委員 日吉の窯でやっているのか。

立花学芸員 いいえ。有田の岩尾對山窯というところで白素地まで焼成して、形のいいものだけ日吉に運び、そこで萌葱を施して、金彩を付けている。本作については『偲ふ』に出てこないなので、詳細は分からないが、必ずしも形が悪いわけではないので、いいものを1本避けてあったのではないかと思う。

伊藤委員 有田に大物を専門に作る窯があるよね。

立花学芸員 はい。でも、本作を作るには、難航を極めたと聞いている。

伊藤委員 前（平成21年）のは、何がダメだったの？

立花学芸員 まず、萌葱の色が全然違う。萌葱というより緑色。あと、金箔も違う。土師萌は、金沢の特注品の厚手のものを使っていたが、前回のものは薄く、しわが多かった。本作は、地の色が違うだけで、本物の萌葱と同じ。

伊藤委員 箔を焼き付けている？

立花学芸員 低温で焼きつけている。ただし、少し触れただけでも擦れてしまう。親族の方がご存命の時は、絶対に触るなど言われていた。

伊藤委員 調書には日吉窯と書いてあるが。

立花学芸員 素地を焼いたのは有田だが、加飾の黄地、金彩は日吉窯でおこなった。

石崎館長 裏をみせられないが。

立花学芸員 調書の写真をご覧ください。実は、銘については2種あって、一つは本作のような高台内の染付銘、もうひとつは高台脇の彫り銘がある。平成21年のものは彫り銘。当初親族の方はそのようなものはないと言われていたが、岩尾對山窯のものは彫り銘だった。制作の初めの頃の白素地に彫られたと思う。

伊藤委員 宮殿のものは染付銘か？

立花学芸員 残念ながら見たことないが、恐らく染付銘。

唐澤委員 半分のサイズの壺もあるじゃないですか。大きいのを作る前の半分のものは、工芸館にある。それを作って、こうゆうのができると判断して、大きいのを作った。やっぱりこれをみると、全然違う。

伊藤委員 でも幕末くらいには、もっと大きなものを焼いていたが。

唐澤委員 しかも薪で焼いているし。

伊藤委員 井上萬二さんが手伝っているの？

立花学芸員 最初はロクロで、萬二さんに頼んでやったが、思う形ができなかった。よって、先ほどの方法に替えた。あと、幕末のもの詳細は分からないが、土師萌は、磁器に粘土質のものを混ぜれば大きなものはできるが、純粋な磁器でこの大きさのものは過去に自分以外で作った者はいないと言っている。

唐澤委員 実際に箔は、ご家族がやってるんですね？

立花学芸員 娘さんが、箔を切るのがうまいと言っていた。最後は動けない状態になって

亡くなったので、ご家族が貼って宮殿に収めた。ただ、最初から家族総出でやるつもりでいたようだ。

唐澤委員 岐阜に来たのは、何かの縁だよね。

伊藤委員 それにしても、消えた筋が出てくるというのは不思議だよね。宮殿のは？

立花学芸員 写真でしか見たことないが、強く出ていないように見える。

橋本委員 内側はどうなっている？

石崎館長 蓋を開けてみよう。

唐澤委員 轆轤目がしっかり残っているね。

矢橋委員 これに出会ったというのは、ラッキー。

石崎館長 岩尾對山窯の窯はどんな窯？50本焼ける？

立花委員 大物用の窯ではあったが、多くを一度に焼けるほどの大きさでない。何回も繰り返し焼いたと思う。

伊藤委員 よく手に入った。買おうと思って買えるものでない。

唐澤委員 非常に安い。

立花委員 先ほど申し上げた黄地の経緯は、丈佳氏のご遺族も、販売の業者も知らなかった。

唐澤委員 免震の展示台造って飾るしかないよね。

矢橋委員 地震で何かあったら大変なので、是非。

(塚本快示 No. 2)

立花学芸員 これも大作だが、大きいものを見た後なので、そのようにみえないかも。伝統工芸展に生前出品された最後の作。翌年も出品されているが、遺作としてである。

唐澤委員 裏をみせて。こちらの「快」ね。東京箱だね。出品してすぐに、東京で作品を入れたんだね。

外館委員 安いですね。ちょっと気の毒。

唐澤委員 快示は安い。途中、窯と本人のサインをごっちゃにしまい、それで値段が付かなくなった。

(豊場惺也 No. 3, 5-23)

花井学芸員 5月16日からの豊場惺也展に出品されたもの。これまで豊場の作品を1点も収蔵していなかった。この機会に収蔵したい。1点購入、他は寄贈。なかには荒川豊蔵とのエピソードの残る初窯の作品、文字を荒川が書いて、豊場と一緒に焼いた作品など。志野は、最初イメージするものがなかなか焼けなかったが、ようやく思うような志野が焼けたころの作品。技法的にたくさんある方であり、技法としても今後も見せられるような内容。赤めの志野は豊蔵資

料館の里帰りの志野茶碗を参考に、自分でも赤土を豊蔵に聞いて探したが、なかなか見つからなかったというもの。丸みのある茶碗の方は、豊蔵が自分のところに持って行って、豊場のところに戻ってきたもの。豊蔵とのかかわりのあるものいくつかあり、思いのある作品が含まれている。豊場は磁器も手掛けていますが、ピンピンとした磁器の硬さは好まない。もぐさ土を混ぜて柔らかい雰囲気磁器を作りたいという考えで作られた茶碗、食器。花入や香合などいろいろあるが、今回出品したものの中から、所蔵したい。自身の中では茶陶だけでなく、食器作りも大切にしたいとの思い。当館では、実用陶磁器という柱もあるので、水月窯で14年間修業していたこともあり、豊場の食器も収蔵したい。初め、登り窯を作りたいと言ったら、豊蔵に今更登り窯を作ってもと言われ、穴窯をつくったそう。翌年に登り窯作って両方で制作を続けている。

伊藤委員 作品の名称は、豊場さんが付けた？

花井学芸員 付けた。例えば、碗の字が「石に完」は、作字しないと出ない字。志野カッコ鼠も、うちはこのようですとのこと。

伊藤委員 瀬戸黒というのも、豊場さんがそう言われた？

花井学芸員 そうです。ただ、あれは置き冷まし。

伊藤委員 焼き置きだと瀬戸黒と言わないが、本人がそう言えばいいだろう。これだけある中で、これ（No.3の瀬戸黒）が購入となった理由は？

花井学芸員 展覧会をやったので、1点は入れたいという思いがあって、瀬戸黒は入れたかった。これは時間をかけて、縮れも生じているもので、豊場も気に入っているもの。

伊藤委員 No.1ということ？

花井学芸員 出品作の中では。瀬戸黒で可児市の指定もとっているので、まずは購入で収蔵したい。

外館委員 可児市の指定は瀬戸黒ということ？

花井学芸員 はい。

伊藤委員 「井」というのは？

花井学芸員 惺也の名前からとっている。「惺（せい）」が井戸の「井（せい）」につながるのか。うしろに粒々があるのは、珪砂を敷いて焼くことを大切にしている。撥水材とかは使わない。

伊藤委員 これも「井」？

花井学芸員 全部そのはず。展覧会に湯呑は2客しか出品しなかった。収蔵にあたって、今後の展示も考えて、5客にしてもらった。長く作っている。るり手は釉掛けで均一になるのは避けて、筆塗りすることを大切にしている。

戸館委員 磁器にもぐさ土をまぜると、こんな感じになるのか？

伊藤委員 貫入が入っている
外館委員 水指の蓋は？
石崎館長 それは、ご本人が削った。
外館委員 すばらしい。
唐澤委員 豊蔵が斗出庵を使うのが 74 年からだから、合ってはいる。で初窯と書いてあるから、その前後。めっちゃめっちゃいい箱造っているから、豊場さんでなく、豊蔵がつくってくれた。あえて、作風がわかるのを選んでくれた感じ。
石崎館長 もうちょっと、食器を貰った方が良かったかもしれない。
伊藤委員 ほんと、そうだね。
花井学芸員 まだ、相談はできる。
唐澤委員 うちも考えている。ここが終わってから。
外館委員 「弟子慳也作」というのに愛情を感じる。
唐澤委員 豊場さんの展覧会の題字は、みんな豊蔵が書いている。
石崎館長 なんかの頃って書いてある。時間が経てば思い出してくれるかも。
唐澤委員 分かりにくい。豊場さんのところに長くいた人が、亡くなった。それも関係するかも。

(三輪龍氣生 No. 24-26)

石崎館長 ギャラリーにあった作品、作家本人が気に入って、この 3 点が三越のエトワール・パリの展覧会に出品された。当館では、三輪龍作を 2 点もっている。両方、どちらかという、エロスの表現の強い作品。これは、もうひとつの内面性を表現する天・地・人シリーズで心の鬼のようなものを表現したもの。もともと、ドロツとしたものを出したい人。それを、三輪窯の伝統の土と白萩の釉で制作。
唐澤委員 これは (No.26) 窯変が出ていて良い。
石崎館長 天・地・人シリーズでは、これが一番いい。
伊藤委員 窯変？
石崎館長 ほんのりピンク。
唐澤委員 ここは何も掛けてない？
石崎館長 そこは鉄。
唐澤委員 見島土を塗っているか、しっかり詰まっているか。ここまでキラキラにはならない。
石崎館長 登り窯で焼いたもの。
唐澤委員 今、見島土も手に入らないから、大変みたい。
石崎館長 三輪さんはたくさん持っている。
伊藤委員 見島土とはどのような土か？

石崎館長 鉄分の多い、赤土。普通の赤土よりは、発色がしぶく落ち着いた感じ。
唐澤委員 そのエリアでない所からも、出ることが分かった。
石崎館長 道端の側溝を掃除すれば、すべて見島土。
唐澤委員 萩の見島で取れる土なので、見島土。
伊藤委員 その土地の土を使うことが大事なことだね。萬古の土はアフリカから輸入している。
石崎委員 この辺の土も、ニュージーランドとかオーストラリアとか、白いのはもってきている。

(坪井明日香 No. 27-39)

石崎館長 これは、外館委員に紹介いただいた。
外館委員 これ (No.36) は最後の女流陶芸の出品作。
石崎館長 56 回展？
外館委員 最終回は、遺作が出された。
石崎館長 55 回展、それはまだ焼いてなかった。
外館委員 これは最終回の前 (55 回展) で、本人ご存命で出品した最後の作。こうした寄贈は、明日香さん本人は喜んでいるだろう。こういったオブジェと、意外と、女流陶芸とかには出していないが、個展では抹茶茶碗とか小さいものも割とやっていた方。
石崎館長 いろんなことをやってたんですね。個展に行って初めて知った。
外館委員 そういったものも含めて入ったので、いかにも日本の陶芸家というか、オブジェをやりつつ茶碗も作るしという感じが伝わるのはいい。
伊藤委員 この人の蓋物は、中を開けたときに楽しいね。
石崎館長 坪井さんのピーマンは、型どり？
外館委員 現物の型どり。仕事場に、生のピーマン置いてあった。ピーマンは色々を使っている。
石崎館長 何か意味がある？
外館委員 形が抑揚のあるものが好み。リンゴとかも使っているが、形が単純。抑揚は女性にも通じるし、料理がすごい得意な方だった。
石崎館長 栽培していた？
外館委員 栽培まではしていないと思う。

(栗木達介 No. 40)

石崎館長 これは寄託作品。水戸忠交易からオークションで手に入れた。最近栗木さん、すごい人気。
唐澤委員 中国の人、海外からビットが入っていた。これは大きすぎて海外に買われて

なかった。壺とかのほう为数が限られていて、持ち主までわかっている。
外館委員 栗木達介のコレクターいた。
伊藤委員 中国の人に人気がある？
唐澤委員 それか、投資目的か。現代美術からしたら安い。どうやってお金をつくって
買うか。頑張ってもらうしかない。
石崎館長 そんなお金ないよと、言っている。

(キム・シモンソン No. 41)

石崎館長 こちらが、キム・シモンソン。2年前の展覧会で、女の子が犬の上に乗った作
品を買った。同じ作家の作品で、寄託。同じ展覧会に出ている。
林学芸員 台座の上の棒に、犬が1点、おなかのところで懸っている。
伊藤委員 動く？
林学芸員 動くので、枕を挟んでいる。展覧会の際はテグスで固定した。
伊藤委員 絶妙なバランスで留まっている？
林学芸員 はい。
伊藤委員 これはどういう作り？
林学芸員 筒状に形を作り、穴をあけている。
伊藤委員 一体？
林学芸員 基本は一体。補強してあるところがある。
橋本委員 軸もセラミック？
林学芸員 いいえ、金属。
橋本委員 これ（グレー部分）は？
林学芸員 これは樹脂っぽいものを付けてある。
伊藤委員 彫刻の世界から見ると、これはどういう位置づけなんだろう。
林学芸員 大学はセラミックの方だったが、もともと彫刻の人。
外館委員 龍氣生さんも、楽さんも、日本の芸大の彫刻出身。
唐澤委員 高くはないんだね。
石崎館長 そのうち買いたい。
外館委員 銀とかパラジウムとかを使っている？
林学芸員 プラチナを使っている。
外館委員 坪井明日香が、銀が高い時に、パラジウムを使っていた。
伊藤委員 これが買えるってことは、その周辺があるということだからいいね。買える
といいね。これ1個だけ持っていてもしょうがないからね。うらやましい。
石崎館長 展示の時は、もう少し高い目線のところだった。もうちょっと強い感じに見
えた。今は可愛い感じ。
外館委員 高いとかっこいい。

林学芸員 暗がりの中で光を当てていた。キムさんは、基本人間だが、犬だけはずっと作り続けている。

伊藤委員 ふわふわ動いていたら面白そう。宙で浮かせるというのは、彫刻家でない発想。

伊藤委員 ここの調書はすごくいいと思うが、箱書きのデータを入れたらもっといい。

■イベントホール A にて

石崎館長 それでは、ご覧いただいた作品についてご意見をいただきたいと思うが、その前に補足する。No.24 と 25 三輪龍氣生は、安藤基金で購入して、安藤基金から寄贈ということとなっている。それでは、購入、寄贈、寄託あわせて伊藤委員からご意見を願います。

伊藤委員 まず、購入の土師萌の大作。畢生の傑作というか、まさに大作。これだけの大きさもあるし、本当にいいものが入ったのかなと思う。買いたいと思っても買えるものでないので、運命的な出会いがあったと思う。塚本も地元のものが入ったことは大事なことです。豊場もいろんな作行のものがあって、さっきも話にあったが、このあともう少し食器が入ったら言うことない。

先ほど雑談レベルで話したが、ここはしっかり調書が書かれていて、すごくいいと思うが、作家の共箱についてはその他の作品データのところに入れるとよい。結構大事なことだと思う。

よくわかる形のコレクションが入るとというのは、すごく意味のあること。三輪龍氣生は代表的な形はこういうスタイル、1点ずつ集めることもあるが、セットで入ったのは大きい。こういう塊ができれば拡がりが出ていく、中核を作るということでいい。坪井さん、すごく面白く、この人の作品は写真で大きさがわからない。個人的に、蓋物が、中を開けるとすごく面白い。その人の全体像をみせるコレクションは、作品の集め方としていいやり方、うらやましいやり方。

唐澤委員 伊藤委員がほとんど話したが、土師萌の大飾壺、縁があつてこちらに来た。試験場時代の作品が地元に残る中で、最晩年の作品がここにあるというのは、すごくいいこと。快示の作品、伝統工芸展の出品作は、意外とあるようでなかなかなくて、それが地元に戻ってきたということは塚本をみせるうえで重要。豊場は作行もそうだし、志野だけ見てもいろんなバリエーションがあり、そういったチョイスをしている。器種もいろいろと揃えているのでいい。食器も豊場の得意とするところなので、そこも今後増やしていくと、一つの世界を作ることができる。龍氣生は館長がいたからこそ寄贈になったんだろう。美濃の若い人たちに刺激を与えることだから、今後しっかり展示して、いろんな方に見て欲しい。坪井の作品もそう。特に 80 年代の作品が何点か含まれ

ていて、これも一つの時代を作った作風なので、現代陶芸美術館に相応しい。寄託の 2 点、特に栗木の作品、何故かこの作品が出るとき高騰していたこともあって、栗木の代表作が残ることはもしかしたらないのかな、という懸念もあるので、ここで寄託して、将来的に収蔵してもらえるといい。日展の出品作が日本に残ることを目指してもらえるといい。2 千万となっているが、オークションだと最高 4 千万の作品も何点も出ていたので、全然安いし、価値がある。キムの作品、海外の人らしい作品なので、現代陶芸美術館に相応しい。今後収蔵を考えているだろうから、是非入れていただきたい。

外館委員

購入の目玉の加藤土師萌、以前の萌葱のときの記憶、よみがえった。形はこのような形だったが、そのときの萌葱の加飾は、土師萌の完成度、格調高さからするとどうかなという疑問がわいた。今回、黄地という新鮮さもプラスに感じたし、大作ということで、現代陶芸美術館が持つにふさわしい。塚本、豊場、この地域ゆかりのいいもの、その作家らしいものが入るのも素晴らしい。加藤土師萌の花入、土師萌はすごい才能のある作家だと、近年個人的にも再評価している。センス、力量を感じる。作行の幅が見せられるということがいい。豊場は、皆が言っている通り、瀬戸黒、志野、黄瀬戸、るり手、やはり地元の作家の作行が全体的にわかるのはいい収集。その分食器の種類が増えると、さらに日本の陶芸家の幅が見せられる。龍氣生、エロスよりはこちらの形のカッコいい、高尚な感覚が見られる。3 点の組み合わせもいい。坪井は急逝し、遺族もバタバタして、縁があって立ち会った。《雲のひきだし》とか調書の方には出品歴書いてなかったが、出品歴の分かるものがいくつか含まれている。女流陶芸の図録とか、ワコーの個展のカタログとか調べていくと、さらに出品歴がわかる。女性としてオブジェを創り出した作家であるが、陶管とか抹茶茶碗とか、オブジェだけでなく、広く生活に関連したものを作っていくような姿勢が、今回の中でも伝わる。栗木の大作、久々にみて、亡くなって値段の上がる作家、特に海外で評価のあがっている作家なので納得できる。キムの犬や人間など具象的なものが、現代陶芸の中にいろいろ含まれていく。三島喜美代とか、具体的に何かモチーフをもとに、やきもので表現する枠の中で、こういうものも可能なのかな。

橋本委員

すでに三方が言い尽くしているのだから、これ以上特にないが、大飾壺は作品が出てくるプロセス、それ以前の知られているエピソードも興味深い。皇居の作品も含め全体の作品調査をいざれしっかりとしてほしい。NHK あたりを巻き込んで宮殿作の調査の話ができるのではないかと。それによって、作品がこちらにあることも知られ、展示にもつながるサイクルもあり得るのではないかと、そろばんをはじいてしまう。寄贈作品、このような形で、地域の作品が一望できる、鳥瞰できるのは、美術館にとっても、作家にとっても幸福な

こと。食器も含まれるとさらに広がって楽しめる。キムの作品、村上隆の公開講座が影響を与えたということ調書を見て始めて知った。現代陶芸ということで、ただ入ってくるのではなく、日本の作家という時代でもないが、芸術的な影響を感じている、その流れの一つが収蔵されるという意味も重い。全体的にいい収蔵。

矢橋委員 加藤土師萌の作、衝撃的な大きさにビックリ仰天。宮殿に行くのと別に、こっそり作っておられたのが面白い。すごいのができて、もう一つ作ろう、どこかに入りたいという思いがあって、岐阜県の地元によくぞ帰って来てくれたという思い。本当に素晴らしいもので、お願いしてでも、ここにおいてほしいもの。研究の成果で手に入った。しぶとく研究して、狙いを定めて、手に入るのを待つということが大事と勉強になった。ここにあれば、また見られる。大きさが実感できる展示をしてほしい。豊場の作品がないというのは、岐阜県人としては残念。よくぞ収集してもらえた。あるべき作品と思う。美術館に入ることは、拍手喝さいしたい。坪井とは縁があって、本人からどうかと勧められて、見せてもらったのがピーマン。京都では生きにくかったと思うが、京都のいいところを作品に取り入れて作っておられて素晴らしい。陶芸を志している方に、参考にしてほしい。全般的に皆さんと同じで、いいコレクションだと思う。

加藤土師萌、宮殿か美術館でないと、見ようがない、展示のしようがない、個人では何ともならない。大きさを感ぜられる展示をしたら、みんなびっくり。ロクロで挽いて、窯で焼いた、近代的な技術でなく、素晴らしい。是非、公開したら、皆東京の方からも大反響が起きる。皆さんの感想が楽しみ。加藤土師萌の値段が急に上がるのではないかと、心配している。加藤土師萌の作品、普通の家にも飾れそうな手ごろな作品が多いが、あんなすごいものは、やはり岐阜県にあって、岐阜県が持つべきもの。大変いい勉強になったし、気分もすっきりした。

石崎館長 購入、寄贈、寄託のすべての作品について、収集に動いていいということによろしいか。

(No. 1~41) すべて意義なし。

石崎館長 ありがとうございます。すべての作品についてご賛同いただいたので、今回の候補作品を収蔵していこうと思う。

久野副館長 お手元の三島喜美代展のチラシ、ただいま設営中だが、せつかくの機会なので別の会場になるがご覧いただければ。以上をもって本日の委員会を閉める。今後とも引き続き当館の運営につきましてご支援賜りますようお願い申し上げます。ありがとうございます。